ドラマ女性学

名画誕生の陰で

ジャーナリスト
松本 侑壬子

フランス印象派の巨匠オーギュスト・ルノワールは、別名〝幸福の画家〟と呼ばれている。その絵画は、時代背景とも、制作時の精神状態とも無関係に、ひたすら柔らかく美しく、まるで夢のような風景や人物たちを描出している。「現実世界は十分につらいのに、それを絵の中で再現する必要はない」というのがルノワールの絵画哲学なのだ。描かれるのは、大抵が女性か少女である。

本作は、第一次世界大戦中の一九一五年、ルノワールが南仏コートダジュールで最愛の妻を亡くし、自らも病で車椅子生活になり、さらに愛する息子のジャンが戦地で負傷するなど最悪の状況の中で、なお動かぬ指に絵筆をくくりつけてキャンバスに向かった晩年の姿を描く。この時期に描きあげたのが、本人自身が生涯最高傑作と位置づけた「浴女たち」（一九一八～一九）である。

ルノワールを失意の底からよみがえらせたのは、緑の丘を自転車に乗って突然やって来た長い金髪の少女アンドレだった。生き生きとした生命力と若々しい美しさに輝くアンドレをひと目見て奮い立った老画家は、彼女をモデルに再び旺盛に絵筆を振るい始める。

アンドレ（愛称デデ）とは何者か。光と色彩あふれるルノワールの絵の中で、自然美や幸福の象徴として、自身の裸身を惜しげもなくさらす、人格のない肉体のみの存在だったのか。女性監督ジル・ブルドスは、そのようには描かない。アンドレを他に類例のない芸術上の存在として描く。アンドレは、初めは紹介されてアルバイト気分でやって来た村の娘である。お金のためと割り切ってポーズをとりながら、ルノワールの渾身の絵筆に及ぼす自らの力を確認し、芸術への目を開いてゆく。折しも戦場から怪我の療養に戻ってきたジャンは、一糸まとわぬ姿で寝椅子に横たわるアンドレに驚くが、やがて心を通わせ二人で父の制作を助けながら、将来を語り合うようになる。

ジャンはまだ兵士の身で、自分自身の道など決めてはおらず、趣味と言えば映画くらいだ。アンドレは、「できるものなら映画女優になりたい。映画のスクリーンに写りたい」と将来の夢を語り、「夢は自分でつかまなくちゃ。怖れちゃだめ」とジャンを励ます。ジャンは兵役を終えるとアンドレと結婚し、映画監督となる。

後にフランス映画を代表する巨匠となったジャン・ルノワール。だが、そもそも監督になった理由は「妻を映画スターにするという願望だけだった」と後に語っている。ジャンの初期の映画「水の娘」（一九二四）などの数本に女優カトリーヌ・エスランの名で主演している。オーギュスト&ジャン・ルノワール父子のミューズとして名作にその姿を永遠に残し、自らの夢をもつかみとったアンドレ。見事というかしたたかというか。ただし、ジャンとの関係は「その後激しくぶつかり合い粉々に砕け散った」のは惜しまれる。が、夢に向かって力いっぱいの人生であっただろう。

全編ルノアールさながらの美しい画像は、今、世界で注目の台湾出身のリー・ピンビンの撮影。

『ルノワール　陽だまりの裸婦』

フランス映画（111分）

監督：ジル・ブルドス

出演：ミシェル・ブーケ、クリスタ・テレ、
ヴァンサン・ロティエ

10月公開予定

© 2012 FIDELITE FILMS / WILD BUNCH / MARS FILMS / FRANCE 2 CINEMA